

<書評論文>

記憶を語る、歴史を書く

Alessandro Portelli

*The Order Has Been Carried Out:
History, Memory, and Meaning of a Nazi Massacre in Rome*
(Palgrave MacMillan, 2003)

朴 沙 羅

1 はじめに

1944年3月23日、ドイツ軍占領下のローマにて、国王宮殿クイリナーレ付近ヴィア・ラセーラを行進中だったドイツ軍に対して、地下レジスタンス組織である愛国行動隊（Gruppi di Azione Patriottica：通称 GAP）が路上に爆弾を設置し、ドイツ軍兵士32名を殺害した。これに対して、ドイツ軍は報復として24時間以内に335名のローマ市民を殺害し、ローマ市街南部にあるアルデアティーナ村の洞窟に遺棄した。

本書は、この24時間の出来事を扱ったものである。ただし、19世紀末から20世紀末の1世紀におよぶローマ市およびイタリア王国・イタリア共和国の歴史と、虐殺された人々の遺族の記憶とに立脚して。

日本国内ではあまり知られていないが、イタリアではこのドイツ軍によるローマ市民の虐殺は「フォッセ・アルデアティーネ（アルデアティーナの溝、転じてアルデアティーネの墓地）の虐殺」として知られている。事件発生以来60年以上にわたって、この事件と被害者たちは新聞・政治団体・教会・法廷において、また歴史研究の対象として、さまざまに記述されてきた。

中でも有力なのが、ドイツ軍による虐殺は正当な報復行為であり、レジスタンス組織が自首しさえすれば、フォッセ・アルデアティーネの虐殺は起こらなかったという説だ。ファシズムとナチズムの支配を打倒し、共和国として出発したはずの戦後イタリアにおいて、

なぜこの説が広く受け入れられてきたのか。ドイツ軍に殺されたのはどのような人々だったのか。この事件はどのような歴史的・社会的背景から生じ、誰によってどのように語られてきたのか。こういった問いに答えることは、第二次大戦下イタリアにおける唯一の無差別虐殺事件のみならず、イタリア王国の成立からベルルスコーニ政権の成立にいたるイタリア現代史を書くことでもある。

本書の筆者、アレッサンドロ・ポルテッリ Alessandro Portelli は、イタリアのオーラルヒストリー研究者として名高い。彼は、ある炭鉱労働者の死と炭鉱町の歴史を描いた作品 (Portelli 1991) 以来ずっと、「語り narrative と記憶とを歴史的事実として扱う」(本書 p16) ことを主張してきた。本書は、被害者遺族や元レジスタンス活動家たちからのインタビュー資料と、軍隊・教会・裁判所・新聞等々の発行した文献資料とを駆使した口述史 (オーラルヒストリー) の成果でもある。

オーラルヒストリーは、その手法のゆえに、かつて何が起こり、それが現在どのような状況においていかに記述されているかというふたつの問いを探究せざるを得ない。その過程で、過去や記憶や歴史といった概念はインタビューデータや文献資料の記述を通して検討にかけられる。本書は、上記ふたつの問いと、「語りと記憶がいかなる意味において歴史的事実であるのか」という問いに、オーラル資料に依拠した現代イタリア 100 年史の記述でもって答えようとする。本稿は、その内容を略述し若干の考察を加えることで、過去の出来事を記述し、それについて語る行為を研究することが、なぜ社会学にとっても示唆深いのかを示そうとするものだ。

2 本書の構成

本書は序章と3部9章からなる。序章では調査対象となる事件の概要、首都ローマの歴史、本書が執筆されるに至った経緯、オーラル資料の特徴、データの出所と調査期間が述べられている。第1部「ローマ」は、イタリア王国の成立から第2次大戦までのローマの歴史を扱い、第2部「フォッセ・アルデアティーネ」ではドイツ軍占領下におけるレジスタンスの展開と、GAP によるドイツ軍の殺害作戦、ドイツ軍側がヒトラーより報復指令を受けてから実際にフォッセ・アルデアティーネで虐殺を行うまでの詳細が明らかにされる。第3部では、遺族たち・教会・ローマ市・メディアが虐殺事件をどのように語り、どのようなものとして扱ってきたか、60年代の学生運動・政治運動はレジスタンスとフォッセ・アルデアティーネをどのように語り使ってきたか、20世紀末のイタリア、特にローマ市において、この虐殺事件に象徴されるイタリア現代史はどのように理解されているのか、と

いった議論が展開される。なお、本書で引用されているオーラル資料は1997年から1999年にかけて、ローマ市内に住む200名から得られている。以下、各部の内容を紹介する。

2-1 第1部「ローマ」

第2章「場所と時代 Places and times」は、ローマが首都として公務員・肉体労働者・職人・教員・軍人・教会関係者たちを集め始めた19世紀末から筆を起こす。1870年に24万人だったローマ市街地の人口は、1890年には46万人に増えた。増加人口の9割は移住者によるもので、かつての首都フィレンツェから移住してきた官僚・軍人・商人、ローマ近郊から移住してきた農業労働者、首都建設ラッシュに伴って雇用された南部出身の労働者たちを中心としていた。彼らの家族がローマに移住することで、学校や商店に新たな雇用が生まれた。フォッセ・アルデアティーネで虐殺された人々は、さまざまな階層に属し、さまざまな地域からローマへ移り住んできた人々あるいはその子孫だった。殺された人々についてのインタビューデータは、必然的に、なぜそのような人々がイタリア各地からローマにやってきて住みついたかを明らかにするものでもあった。

第3章「ファシズムとその不満 Fascism and its discontents」では、20年に及ぶファシスト党独裁政権下で、ローマの街がどのように変化していったかが述べられる。ムッソリーニのローマ進軍に抵抗した労働者組織は、ローマ大学ラ・サピエンツァ近辺のサン・ロレンツォ地区をはじめとするスラムを根拠地にしていた。ムッソリーニによるローマ市の再編計画は、このようなローマ市内各地に点在するスラムを撤去することを含んでいた。1931年、ローマ市がファシスト民兵と警察機動隊に対してスラム街の監視を命じるや、ローマ市中心部に点在していたスラムは急速に撤去され、居住者は郊外の指定地域へと移住させられた。しかし、この強制撤去と移住は、ローマにおけるレジスタンス運動の温床を育てることにつながっていった。

第4章「戦争行為 Acts of war」は第2次大戦中を扱っている。1940年6月10日、イタリアは枢軸国として世界大戦に参戦した。その結果、エチオピア、ロシア、ユーゴスラヴィアといった各地で、イタリア軍は連合軍と戦闘を開始した。しかし、イタリア軍は1941年末には各地で劣勢に転じ、1943年7月9日には連合軍がシチリア島に上陸。7月19日、ローマ市は最初の空爆を経験する。その被害を受けた人々の中には、数か月後にレジスタンスに身を投じた人々がいた。1943年9月8日、イタリア王国は連合軍に降伏する。その翌日、国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ3世をはじめとする政権首脳部はローマを脱出し、イタリア南部布林ディシへ向かった。同時に、イタリアの降伏を予測していたドイツ軍が北部からイタリアへ侵攻し、直ちにローマを占領した。突然の降伏と国王らの逃亡、それ

に続くドイツ軍の占領は、ローマに政治的・軍事的空白をもたらした。兵士の中には戦線を離脱するものも、ファシスト政権を追って北部へ移動するものも、あるいはドイツ軍との戦闘に参加するものも現れた。フォッセ・アルデアティーネで虐殺された人々の中には、このとき戦線を離脱しドイツ軍に捕らわれたイタリア兵もいれば、ローマはボルタ・サン・パオロでドイツ軍のローマ侵攻に抵抗して捕らわれた市民もいた。ボルタ・サン・パオロでの戦闘はイタリア軍・ローマ市民側に 370 名の被害者を出して終結し、1944 年 9 月 10 日、ローマはドイツ軍の占領下に置かれた。

2-2 第 2 部「フォッセ・アルデアティーネ」

第 5 章「レジスタンス Resistance」は、ドイツ軍支配下のローマで地下活動を展開した人々に焦点をあてる。ローマはバドリオ政権によって非武装都市だと宣言されたものの、ドイツ軍からも連合軍からもそのようには扱われなかった。ドイツ軍はユダヤ人の検挙と強制収容、反ナチズム・反ファシズム運動関係者の検挙を行った。同時に、連合軍による空爆が続き、飢餓と恐怖が市内を覆った。レジスタンスはこのような状況下で、学生や郊外に集住していた労働者、あるいは一般市民の中から生まれてきたのだった。1990 年代末にインタビューに答えることのできた人々は、1944 年には 10 代後半から 20 代前半だった。彼ら・彼女らは人を殺害する恐怖や家族や友人と一切の連絡を絶つことによる孤独、独特の高揚感とごく限られたレジスタンス参加者同士での親密感について述べる。ローマのレジスタンスは、占領下で解散させられた警察組織やイタリア軍と合流し組織化されていた。一方、連合軍はレジスタンス組織と連絡を取り、ドイツ軍に対する攻撃を依頼する。ヴィア・ラセーラで爆発したダイナマイトは、このような経緯で前線からもたらされたものだった。「ヴィア・ラセーラは、だから、戦争におけるこの局面の頂点であり、帰結だった」(P129)。

第 6 章「ヴィア・ラセーラ Via Rasella」は、5 月 23 日に起こったレジスタンスによるドイツ軍攻撃事件を詳述している。レジスタンス参加者ロザリオ・ベンティヴェーニャとカルラ・カッポーニが設置した爆弾は、ドイツ軍兵士 32 名と市民 1 名の死者を出した。レジスタンスが攻撃したドイツ軍とは、南チロル出身者、すなわちかつてイタリア国民であった人々によって編成されていた。彼らが白昼堂々、国王宮殿のすぐ近くで爆殺されたことは、これまでレジスタンスによる攻撃の実態を隠し続けてきたドイツ軍にとって、実質的というよりも象徴的な損害をもたらした。ベルリンにいたヒトラーは、その報せを受けるや、24 時間以内にドイツ軍兵士 1 名につきイタリア人 50 名を殺害して報復とするよう指令を出す。しかしその指令は、数時間後に「ドイツ軍兵士 1 名につきイタリア人 20 名以上」と変化する。最終的に、ローマに駐留していたイタリア戦線司令官アルベルト・

ケッセルリンク、SS（ナチス親衛隊）隊長ヘルベルト・カブラー、カブラーの部下エーリヒ・ブリーブケらは、ドイツ軍兵士1名につきイタリア人10名を殺害することを決定する。しかし、当時ローマ各地の拘置所に収容されていた死刑囚は総勢3名。すでに検挙されていた重・軽犯罪者とレジスタンス参加者を含めても220名。そこで5月23日までに検挙されていたユダヤ人を含め、ようやく320名に達した。葬儀を出す時間と手間を省くため、天然の洞窟が多くローマ市内から遠くないアルデアティーナ村の採掘場が選ばれた。

第7章「虐殺 Massacre」は、5月24日の夕方に335名⁽¹⁾が虐殺され遺棄される過程を明らかにしている。といっても、335名を殺害したドイツ軍兵士やSS隊員は被害者を個人として認識してはおらず、目撃者は殺害されたため、実際に何が起こったのかは明らかにできない。その代りに述べられるのは、同じ拘置所に収容されていた人々が消えた日のことであり、配偶者や子供、兄弟と面会しに刑務所に通っていた女性たちが異変を感じ取った時であり、アルデアティーナ村の住民が異臭に気付いた時である。最終的に教皇庁と連合軍の同意のもと、ローマ大学の医師と被害者遺族らによって虐殺被害者の発掘と埋葬が行われたのは、ローマからドイツ軍が撤退しておよそ1か月後、1944年7月になってからだった。

2-3 第3部「記憶」

第3部は、フォッセ・アルデアティーネの虐殺が誰によってどのように語られてきたかを明らかにしていく。ヴィア・ラセーラのレジスタンス攻撃は虐殺の始まりではなく第2次世界大戦の結果だった。フォッセ・アルデアティーネの虐殺は何かの終わりではなく、その出来事を何らかの事件として理解しようとする試みの始まりだった。

第8章「奇妙な悲しみ A strange grief」は戦後直後から50年代を対象としている。虐殺は寡婦や孤児、子に先立たれた親をもたらしした。彼らは戦後、貧困と偏見の中で生きることになった。同時に、遺族・ローマ市・イタリア政府は、「なぜ彼らは殺されたのか」という問いに直面した。それは、殺された人々が誰で、誰によって殺されたのかを理解することと表裏一体だった。ヨーロッパでの冷戦が始まり、国内外で左右の対立が深まる中、中道右派キリスト教民衆党が政権をとったイタリアで、虐殺に対するドイツ軍の責任は罷免された。また、レジスタンスやパルチザンの参加者たちが共産党・社会党に再編されていく中で、ヴィア・ラセーラでのレジスタンス攻撃が虐殺を導いたとする風評が広まった。

⁽¹⁾ 10名は24日になってドイツ軍兵士が1名死亡したために急きょ殺害者リストに加えられ、5名は虐殺現場で遺体の遺棄に協力したため目撃者として殺害された。

さらに、虐殺被害者たちを全てユダヤ人・共産主義者・犯罪者と見なす偏見は、遺族の結婚や就職を左右した。

第9章「記憶の政治学 Politics of memory」は、1950年代から90年代まで、アルデアティーネの虐殺が政治・メディア・裁判所においてどのように説明されてきたかを明らかにしている。虐殺された人々がイタリア軍将校や国家官僚から下層労働者や農民まで、多様な階層の出身だったことで、フォッセ・アルデアティーネの虐殺は「ユダヤ人」や「共産主義者」ではなく「イタリア国民」が、独立のために払わなければならなかった犠牲だとされた。殺された人々は（加害者の対概念である）「被害者」ではなく、独立し民主化されたイタリアの「殉教者」だとされた。他方、レジスタンス参加者たちは共産黨員としてイタリア各地やチェコスロヴァキア、中国、ヴェトナム等で活動しながら、「自分たちが自首すれば、あの虐殺は避けられたのか」と自問し続けることになった。60年代半ば以降、中道左派政権のもと公式の追悼式典が回を重ね、より多くの政府関係者が出席するようになる一方で、誰が誰を、何のために殺したのかという問いは放置された。

フォッセ・アルデアティーネの虐殺を指揮したヘルベルト・カブラーの裁判は1948年から1957年まで続いた。それと並行してレジスタンス組織に虐殺の責任があるとした訴訟も行われた。最終的に、ヴィア・ラセーラでの攻撃は軍隊によらない違法な攻撃だとされ、カブラーが虐殺を指導したのは戦時の指令に基づいた合法な行為だとされた。カブラーは1976年に刑務所から西ドイツへ逃亡し、1978年に死亡した。カブラーの部下で実際に虐殺を行ったエーリヒ・ブリーブケはアルゼンチンへ亡命していたが、1994年に発見されてイタリアへ移送され、裁判を受けた。ブリーブケは終身刑を受けたが、イタリアでの終身刑とは解放処遇と同じであったため、遺族から激しい反発を呼んだ。

最終章「あとから生まれて Born Later」は、いわゆる戦後生まれの世代がレジスタンスとフォッセ・アルデアティーネの虐殺とをどのような文脈で理解してきたのかについて述べている。60年代末から70年代にかけて、学生運動を担った人々にとって、レジスタンスは階級闘争と武装闘争の先例であり、レジスタンス参加者は学生運動が乗り越えるべき旧世代の人々だった。他方、レジスタンス参加者にとって学生運動は「ブルジョワの子どもの遊び」であり、理解できない運動だった。「赤い旅団」による首相アルド・モロの誘拐事件（1979年）にいたってはじめて、レジスタンス参加者の一部は新たな世代の「運動 Movimento」を軍事行動としてのみ評価した。それからさらに世代が下ると、もはやレジスタンス運動はほとんど知られず、フォッセ・アルデアティーネの虐殺はユダヤ人の強制収容と同様に考えられ、虐殺現場は「遠足で行ったことのある場所」のひとつだと言われるようになる。しかし事件との距離感は、単なる無知に由来しつつも、虐殺の責任を

レジスタンス組織に負わせたり、被害者を「殉教者」と見なしたりするのを難しくしている。今やフォッセ・アルデアティーネの虐殺は、テレビやインターネット上で目にする、世界中で起こっている「無意味な死」の一例に過ぎない。確かに、1944年5月24日に殺された335名は、殺されることでローマ市に軍事占領からの解放をもたらしたわけでもなければ、理想のために殺されたわけでもなく、ましてやレジスタンスの被害者でもなかった。「殉教者」から「レジスタンスの被害者」、そして「無意味に殺された人々」へと被害者のアイデンティティが変化していく過程は、フォッセ・アルデアティーネの虐殺がある意味で忘れられていく過程であり、別のものとして記憶されていく過程でもある。

3 考察

さて、ここまで本書の内容を簡単に紹介してきたわけだが、実をいうと、これは本書の肝要な部分を全て省いてしまったに等しい。なぜなら、本書の半分がたはインタビューのトランスクリプトであり、そのひとつひとつが「歴史」として本書の中心部分をなしているからだ。本書は「語る」と記憶することとはそれ自体が歴史学の探求課題である」という方針に基づいて、第1部で虐殺被害者の背景と事件を生んだローマという都市の歴史を描き、第2部で虐殺事件そのものの過程を検討し、第3部で虐殺事件が「何か」として追悼されたり記憶されたり忘却されたりしていく過程を述べている。

これまで見てきたとおり、1944年5月24日にアルデアティーナ村の洞窟で起こったことを何と記述するかということは、それ自体が、歴史的・政治的立場の決定を含んでいる。死者を「共産党に率いられたレジスタンスの被害者」だと呼ぶことは、戦後イタリアがどのような政治状況の中にあったのかということを示してしまう。死者を「殉教者」と呼ぶことは、戦後イタリアが国家として西ドイツに対する謝罪と補償とを求めないことと不可分だった。さらに、本書でいうところの「記憶」とは、語り手の身体や精神のどこかにある何かではなく、追悼したりインタビューに回答したりといった具体的な行為を指している。ここにおいて、「記憶とは歴史的事実である」というポルテッリの言明を次のようにいにかえることが出来よう。つまり、何かについて述べる行為がそれ自体として意味を持ち、何かを述べる行為と述べられる対象とを分けることなど出来ない、と。

これは「ひとりの人（または都市、制度、国も）は、ヒストリーを語るのに先立って独立したひとつのリアリティを持っている」（Bertaux 1997=2003:61）という「リアリスト」の主張とも、ライフストーリー・インタビューに「会話」「ストーリー領域」「物語世界」の3つの次元があるとし、＜語られること *whats*＞と＜語り方 *hows*＞の相互関係に注目

しようとする「相互行為としてのライフストーリー」(桜井 2002: 126-127)とも異なった主張だといえよう。過去の出来事を語る行為がまた歴史的事実であるとき、「独立したひとつのリアリティ」は存在し得ず、「会話」と「ストーリー領域」と「物語世界」とを分けることも出来ない。

インタビューが述べた出来事について他の資料に当たるのは、「独立したリアリティ」を調べるためではない。「外的基準」をもつ「歴史的眞実」と「内的一貫性」をもつ「自伝的眞実」とを対立させる(桜井 2002: 201-202)必要もない。なぜなら、そもそも過去の出来事について述べる行為は「歴史的眞実」そのものであり、単にどの「歴史的眞実」を語っているかが異なるだけだからだ。「この本が、歴史と記憶の語りであるだけでなく、積極的に歴史に介入するものであればいいと思う」(p20)というのは、そういう意味においてである。

過去について記述するとき、その記述は「不正確」だったり「間違っ」たりする。だから、インタビュー資料を用いる歴史研究は「口述の oral」歴史と呼ばれ、文献史学とあるていど対立せざるを得なかった。しかし、その「不正確さ」はまた別の情報を伝える資料として検討の材料となる。「あの事件は何だったのか」「あの人は誰だったのか」「あの人はなぜ死んだのか」——これらに対する答えは、回答者の置かれた歴史と社会とを否応なく反映してしまう。だから、本書は過去の出来事だけでなくその記述もまた歴史学の対象だと示す研究である。そして同時に、出来事が何として記述され、その理解がどのように共有されてきたのかという、社会的であらざるを得ない問題を扱っているという点で、本書は社会学の探求課題を共有しているのだ。

参考文献

- Bertaux, Daniel, 1987, *Le Recit de Vie*, NATHAN Universitere. (=小林多寿子, 2003, 『ライフストーリー——エスノ社会学的パースペクティヴ』ミネルヴァ書房.)
- Portelli, Alessandro, 1991, *The Death of Luigi Trastulli and Other Stories: Form and Meaning in Oral History*, State University of New York, Albany.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

(ばく さら・博士後期課程)